

長野県立歴史館たより

2019年 秋号 vol.100

特集

戦国小笠原三代展

開館25周年記念



開館25周年を迎え

歴史学習の拠点として



長野県教育委員会教育長
原山 隆一

今年で開館25周年を迎える県立歴史館は、考古資料や歴史資料等を収集・保存して、広く県民の利用に供し、その教養及び文化の振興に寄与するため、1994（平成6）年11月に開館いたしました。

開館から25年間にわたり、県民の皆様からご支援、ご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

県立歴史館は、史資料の展示や閲覧ができる博物館としての役割のほか、県内の埋蔵文化財や歴史的に重要な行政文書・古文書を収集、整理、保存し、長野県の文化財・歴史の調査研究を行う機関としての役割を担ってまいりました。

特に埋蔵文化財の資料は、長野県の開発の歴史とも深く関わっています。

平成9年の長野新幹線開業及び上信越自動車道全通、翌年の長野オリンピック開催など、長野県の開発が大きく進む中、この開発に伴い失われてしまう遺跡を記録保存し、真摯に研究を積み重ねてまいりました。中には、その成果が評価され、重要文化財に指定された埋蔵文化財もあります。

このような文化財は、歴史や文化を理解するためにはなくてはならないものであると同時に、将来の文化の向上発展の基礎となるものであり、県民の貴重な共有財産です。文化財を安定的に保護し、後世に継承していく使命を私たちは担っています。

また、文化財への関心、保護意識を高めるとともに、文化財活用の推進を図るため、地域の文化財や歴史を学び、再認識、再発見するための場や機会の提供、充実も求められています。

今後も、県立歴史館は、埋蔵文化財や歴史的に重要な行政文書・古文書を収集、保管し、後世に継承していくとともに、研究を積み重ね、その成

果の展示等を通して公開し、歴史・文化に触れる機会を多くの県民の皆様提供してまいります。

元号が変わるとともに、開館25周年を迎える節目となる令和元年は、様々な企画展を開催いたします。

8月18日まで開催している収蔵品展「長野県立歴史館の名品」では、県立歴史館が開館から25年間にわたって県内で発掘調査した埋蔵文化財や古文書、長野県と関係の深い工芸品を収集、保存、活用してきた集大成として、当館が所有する歴史的名品を展示いたします。

続いて、信濃国の守護であった小笠原長時、貞慶、秀政の小笠原三代について展示する「戦国小笠原三代」展、土偶展「国宝土偶」及び「中部高地の土偶」を順次開催いたします。

特に、10月26日から11月10日まで開催する土偶展「国宝土偶」では、地方では全国で初めて、国宝に指定されている土偶5点のすべてを県立歴史館で展示いたします。

また、土偶展「中部高地の土偶」では、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」に関連して、長野県と山梨県で発掘された特徴ある土偶を展示いたします。

ぜひ、新元号の令和におきましても、多くの皆様にお越しいただき、長野県そして日本の歴史・文化、伝統に触れていただければ幸いです。

開館25周年を迎え

理想を高く掲げて



長野県立歴史館長
菅 本 正 治

1994（平成6）年11月3日、県民の夢を乗せて長野県立歴史館が開館し、開館記念企画展「赤い土器のクニ」を開催してから25年が経ちました。これより先の1988（昭和63）年4月、「第二次長野県総合5か年計画」において、「埋蔵文化財、重要な史資料の展示、保存、研究機能を備えた施設を新設」する方針が出されてから足かけ7年目でした。それから四半世紀を過ぎ、歴史館も変化を遂げてきました。

本館運営の基礎となる「長野県立歴史館条例」には、「（設置）第2条 考古資料、歴史的価値を有する文書、その他歴史資料等を収集し、保存して、広く県民の利用に供し、その教養及び文化の振興に寄与するため、長野県立歴史館（以下「歴史館」という。）を千曲市に設置する。」とあります。条例に記されているように、歴史館の使命の第一義は「考古資料、歴史的価値を有する文書、その他歴史資料等を収集」することであり、それを保存し、県民の利用に供し、最終的には県民の「教養及び文化の振興に寄与」する役割を、私たちは負っていかねばなりません。

多くの方は歴史館を展示のみで評価し、もっとも大事な基礎作業に思いを寄せていただけません。少ない費用で、狭い展示面積で、県民に何を訴えていくか、どうしたら県民に喜んでいただけるか、展示は難しい作業です。また、所在地が北にあることもあって中南信地方では歴史館の知名度が低く、全県から人を集めるのが難しい状況です。

初代館長の市川健夫氏は、学際主義、国際主義、民際主義の三際主義を強調しました。氏は地理学者であったが故にこうした提案をしたのでしょうか、これらがどれだけ進展しているかは疑問です。民俗学分野も自然分野もなく、考古学と歴史学だ

けで、それぞれの専門を核とし、時間軸で研究する場合、思いつきでない実証的な学際主義は難しいのです。国際交流もなく、専門に重きを置いた研究において、国際性を得ることも至難の技です。民際主義は県民の声を聞くことだといいます。県民との接触は以前と比較すると格段に進んでいますが、その意見を取り入れて展示をあらたにするといったことは全くできていません。

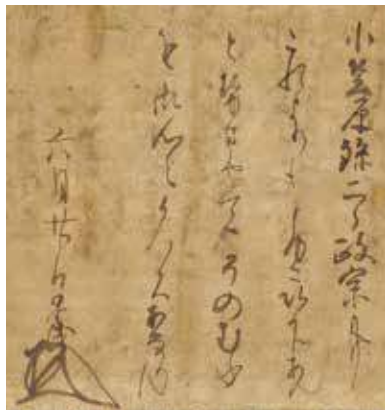
歴史館の職員数もおそらく最盛期の3分2程度に減っています。収集した資料は保存し、研究して県民の利用に供すべきですが、サービスを含めて職員の業務は増大しており、じっくり研究できる環境にはありません。余裕がない中でノルマに迫られているのも実状です。

しかし、私たちは県民の教養を高め、文化振興に寄与できる職場と信じて、前を向いて歩んでいます。館長として職員を誇りに思うのは、その親切な対応です。我が身を削って子どもたちに真摯に対応する姿を見ていると、博物館員としてのあるべき姿の一端を思い知ります。だからこそ、こうした職員たちがゆとりをもって研究できる環境を作りたいものです。

いずれにしろ、私たちは歴史館のためではなく、県民の文化向上のためにを合い言葉に努力しています。25周年は長い歴史館の歴史ではまだまだ幼児の世界に過ぎません。チーム歴史館は、県民から必要とされるように、県民から歴史館があってよかったとっていただける館になるため、理想を高く掲げて前進する覚悟です。

戦国 小笠原三代

■ はじめに



足利尊氏自筆書状（当館蔵）

昨年、小笠原^{まさむね}政宗という人物を信濃守護に任じたことを示す足利尊氏の自筆書状が発見され話題となりました。40通ほどしか確認されていない尊氏自筆

書状は、流れる筆致と青墨の淡麗さが美しいものです。今回、当館に収蔵されたこの文書を手がかりに、信濃国にとって小笠原氏とはどのような一族だったのかを読み解く、戦国時代小笠原氏を特集した初の企画展を開催します。ここでは概略をご紹介します。

■ 小笠原長時の生涯

小笠原氏は足利尊氏の鎌倉幕府倒幕の挙兵にいち早く賛同しました。以来、南北朝・室町時代、断続的に信濃国守護を歴任しています。

しかし大塔合戦や、一族の分裂により、室町時代中期以降は内紛状態となりました。これを統一したのが長棟^{ながむね}です。満を持して守護として登場するのが子の長時でした。時に1542（天文11）年のことです。

その前年、隣国では同族の甲斐国武田晴信が父信虎を追放し、信濃への出兵を進めてきたのです。長時と晴信。同族であり、家督継承も同時期でありながら、両者は最初から敵対関係にありました。

長時は晴信によって府中（松本市）を追放され、各地を転々としたことから、時代劇や小説な

どでは流浪の守護の代名詞として描かれています。しかし長時は、当時の室町幕府將軍足利義輝や畿内を制圧した三好長慶^{ながよし}、あるいは幕府奉公衆京都小笠原氏などと密接な関係を築きなが



木造大日如来座像（沢村区蔵）

ら信濃復帰の動きをすすめていることがうかがえます。1561（永禄4）年には義輝^{ごないしょ}の御内書が発給され、長時の帰国を助けるよう上杉謙信へ伝達されました。その直後謙信は川中島へ出陣、川中島最大の激戦となりました。つまり戦いの発端は長時にあったのです。謙信の死後、長時は会津の蘆名盛氏^{あしなもりうじ}のもとに迎えられました。小笠原氏の府中復帰は、子の貞慶^{さだよし}の時代に持ち越されました。

■ 深志を「松本」と命名した貞慶

長時が畿内から越後へ移ったのち、子の貞慶は織田信長の配下となりました。1575（天正3）年頃です。当時信長は、武田勝頼を包囲するため東国の諸大名と全方位外交を展開していました。その際の取次役となったのが貞慶です。信長は、武田氏滅亡後は旧領を安堵する旨を貞慶に約束していました。そのため貞慶はかつての旧臣へ協力を要請する文書を発給しています。

1582（天正10）年に武田氏が滅亡すると、いよいよ信長は信濃国の支配に乗り出しました。安曇・筑摩両郡は木曾義昌^{きそよしまさ}に与えられたため、失意の貞慶は三河国徳川家康のもとへ隠棲します。し



小笠原貞慶書状（東京大学史料編纂所蔵）

かし信長が本能寺の変で没すると、貞慶は家康の威光を背景に、伊那や箕輪などにいる旧臣を糾合し府中を奪還しました。苦節30年、待ちに待った府中復帰を記念し、深志を「松本」と名付けました。

しかし旧領を回復したものの、境目の上杉景勝、木曾義昌等とは紛争が絶えませんでした。また家康との関係から、貞慶は息子秀政（貞政）を石川数正の人質として預けていました。1585（天正13）年家康と羽柴秀吉が対立すると、秀吉は境目の国衆たちを調略します。とくに石川数正が出兵すると貞慶は秀政と共に秀吉方へ付きました。

家康と貞慶の反目に対し、秀吉は貞慶を隠居させ、秀政には信長により自害させられた家康の嫡男信康の娘福姫（登久姫）を嫁がせました。両家を親族とすることで和解させたのです。家康は秀政に安曇・筑摩の安堵を約束しました。



真向阿弥陀如来画像
（隆岩寺蔵）

ただし、隠居した貞慶は、徳川大名となった秀政とは別に家を有し、豊臣大名として1590（天正18）年の小田原攻めに参加しました。貞慶・秀政はその直後に下総国古河・栗橋へ移封となりました。左の写真は信康の守本尊「真向阿弥陀如来像」で、福姫が輿入れの際に持参したものです。

■ 小笠原家を大成した秀政

秀政は古河を経て飯田藩主となりました。秀政の娘は、家康と秀忠の養女となり、二人の息子も秀忠から諱を拝領し、忠脩・忠政（真）



大坂夏の陣の小笠原秀政
（大阪城天守閣蔵）

を名乗りました。

秀忠將軍時代は、格の上では親藩に準じる譜代大名として重きをなしました。

1613（慶長18）年、2度目の松本藩主（8万石）となった秀政は、法度や制札を数多く発給し、ようやくシステム化された支配が進められました。しかし大坂夏の陣では、激戦となった家康本隊を守る天王寺口の戦いで秀政・忠脩父子ともども没しました。小笠原家最大のピンチを迎えます。

■ なぜ小笠原家は残ったのか

小笠原氏は家康や秀忠との縁戚関係、さらに夏の陣での決死の奮戦により、その後忠真が明石藩そして小倉藩15万石として所領を拡大し、江戸時代を生き残ります。また一族は唐津・中津・安志各藩などにも広がりました。

小笠原長時・貞慶そして秀政の共通点は、それまで他家の学問であった様ざまな諸故実を集積したことが挙げられます。とくに秀政は飯田藩時代、祖父・父が集めた諸本を体系化し、これが近世武家の故実書として広まりを見せました。

長時を追放した武田家は滅び、流浪を余儀なくされた小笠原家は名実ともに生き残りました。かいま見えるのは、小笠原氏の持つ広範なネットワークや自家の学問を活用した多彩な活動です。

戦国武將を決して戦いのみでは語ることができないことをこの三代は教えてくれます。

（村石正行）



土偶を集めた大展示会の開催

近年、縄文時代に作られた土人形「土偶」は、美術的な観点から再評価されています。あるいは表情や仕草の“かわいさ”から、多くの方々の関心を集めるようになりました。長野県では国宝2箇のほか、2千点を超える土偶が発見されており、全国でも有数の土偶製作地域です。当館では開館25周年を機に、長野県の縄文文化を象徴する土偶にスポットを合わせた企画展を開催します。

10月26日(土)～11月10日(日)には、国宝土偶5箇が一堂に会します。縄文時代の至高の造形力や表現力を間近に見比べ、異なる時期と地域の個性を感じ取ってみてください。

続く11月23日(土)～令和2年2月2日(日)には、長野・山梨両県を中心に「中部高地の土偶」が大集合します。また、これらに先行して9月からは、常設展示室で館蔵土偶、弥生時代の人形土器、古代の木製人形などを一挙公開します。

この機会をお見逃しなく、ご来館をお待ちしております。

ヒトガタへの関心と、祈りの多様性

あらゆる場で、ヒトの形をしたモノや画像などがある現代。同じ感覚で土偶の品定めをするところから入ってみましょう。まずは関心を持つことが大切です。そして、品定めは第一印象が基本といえども、比べる作業を伴います。

私たち人間はなぜヒトの形をしたモノ（ヒトガタ）に関心を示すのでしょうか。群れで暮らし一人では生きられない、あるいは脳の進化により現実だけでは満たされない、などの理由が考えられます。しかし、ヒトは数百万年の間ヒトガタを作りませんでした。日本列島でヒトガタ（土偶）が作られるようになるのは縄文時代以降です。なぜ、この時期ヒトガタが必要になったのでしょうか。

国宝を比べてみると、顔や体つき、強調された部位の違いが際立っていることに気づくでしょう。また、役目を終えた後の仕舞われ方も異なります。こうした点から、時期や地域ごとに土偶に託した意味が多様だったことがうかがえます。

この機会に、国宝一体一体と対面し、想像をふくらませてみてはいかがでしょうか。



国宝土偶

左より山形県舟形町西ノ前遺跡「縄文の女神」（山形県蔵）、茅野市棚畑遺跡「縄文のビーナス」・中ッ原遺跡「仮面の女神」（茅野市蔵）、青森県八戸市風張1遺跡「合掌土偶」（八戸市蔵）、北海道函館市著保内野遺跡「中空土偶茅空」（函館市蔵）

さて、「中部高地の土偶」については、次号に譲り、ここでは9月から展示替えとなる常設展示室の特集展示をご紹介します。

常設展

縄文

館蔵土偶と土偶装飾付土器

ここでは、当館所蔵の土偶と土偶装飾付土器（複製）などで構成し、時代の変化を追っていきます。

県内では前期に遡る土偶はごくわずかです。ところが、中期（約5,400年前）に入ると、頭頂部が平らか凹む「河童形土偶」が盛んに作られ始めます（千曲市屋代遺跡群）。

中期中葉（約5,300～5,000年前）の特徴は、県中央部を境に、土偶装飾付土器や顔面把手付土器が盛んに作られる西・南半部（富士見町藤内遺跡ほか）と、これらをほとんど作らない東・北半部に二分される点です。両地域では、ヒトガタや顔に対する考え方が大きく異なっていたと考えられます。ただし、土偶は両地域で盛んに作られます。

遺跡数が激減する中期末葉（約4,300年前）には、土偶がほとんど作られなくなります。寒冷化で生活が成り立たなくなり、これまでの土偶信仰が薄れ、環状列石や配石などの大規模な施設を伴う祭祀が主流になっていきました。

気候が好転する後期前葉（約4,000年前）、仮面土偶（安曇野市北村遺跡）が作られます。ただし、長くは続きませんでした。東北で遮光器土偶が盛んに作られていた晩期（約3000年前）には、県内では簡素な土偶が見られる程度にとどまります。



安曇野市北村遺跡の仮面土偶 縄文時代後期（当館蔵）

常設展

弥生

土偶形容器から人形土器へ

弥生時代に入ると土偶が姿を消し、骨を納めるための土偶形容器（上田市淵ノ上遺跡）がヒトガタの代表例となります。弥生時代後期には、千曲川流域を中心に人形土器（佐久市西一里塚遺跡など）が作られました。

これらも墓に伴う例が多く、弥生時代のヒトガタは死者との関係を強めていきます。



佐久市西一里塚遺跡の人形土器
弥生時代後期（当館蔵）

常設展

古代

木製人形の世界と仏像

県内では、形象埴輪を持つ古墳が少なく人を表現した埴輪もほとんど見つかりません。再び、ヒトガタが多く作られるようになるのは、飛鳥～平安時代（7～12世紀）になってからです。祓などの祭事で、自分の汚れた部分を木製人形に肩代わりしてもらい川に流したと考えられています（千曲市屋代遺跡群）。一方、ヒトガタをした信仰の対象＝仏像が、地方の一般集落へも広まりを見せました（篠ノ井遺跡群の埴仏ほか）。

常設展示室では、このような内容で長野県における縄文時代から平安時代のヒトガタの盛衰と、ヒトガタに託した意味の変化をご紹介します。

（寺内隆夫）



千曲市屋代遺跡群の木製祭祀具
飛鳥・奈良時代
（当館蔵）

縄文時代の磨石類について

“採集活動を支えた”磨石・凹石・敲石

扁平礫や円礫の平坦面や側面に、磨り・みがき痕がある「磨石」、すり鉢状の小さな凹みがある「凹石」、敲いた跡がある「敲石」と分類する石器があります。そうした特徴が複合的に残る個体も多いことから、磨石類とまとめる場合もあります。石皿・台石と呼ばれる大形の礫石器と組み合わせて利用したと考えられています。

長野県では、後期旧石器時代の日向林B遺跡（信濃町）の磨石などを除けば、縄文時代草創期以降の遺跡で出土することが多く、特に縄文時代中期後半から後期前半に多量の磨石類が確認できます。出土状況や民俗事例から、クルミなど堅果類の加工道具と推定され、縄文時代の植物質食料の利用や粉食文化の指標と捉えられる石器です。

千曲市屋代遺跡群出土の磨石類

1991（平成3）年から調査された千曲市屋代遺跡群では多量の磨石類が出土し、特に縄文時代中期後葉には遺構内出土例でも1,149点が出土しています。中期後葉の磨石類を見てみると、多くは遺跡近くの千曲川で採取可能な安山岩や硬質な砂岩で、片手で持ち上げることが可能な1kg以下の礫を素材としています。形状は扁平な楕円形のほかに、細長く扁平なもの、手のひらサイズの



写真1 屋代遺跡群の磨石類（当館蔵）

扁平なもの、球状のもの、棒状のものなどがあります。「対象物を磨る、あるいは敲く」という動作に適する素材を選択し、利用していたと思われます。1kgを超えるもの、手のひらサイズの扁平なものなどは、台石としてほかの磨石類と組み合わせ使用した可能性も考えられます。

写真2①の左端部分は、表裏両面から磨り、左の側面に稜を作り出しています。稜の上には敲いた跡が複数あります。②は左の側面に爪サイズの深いV字状の凹みが、③は左側面の稜と直交するように線状の凹みが残っています（→部分）。こうした痕跡は、殻の固い堅果類を敲き潰したためと考えられる一方で、打製石斧など剥片石器の調整加工を行った跡と捉える説もあります^{注1}。

屋代遺跡群で磨石類が多量に出土することは、堅果類の利用が多いことを示すほか、石皿など大形の石器を使用せずに磨石類を組み合わせて使用したことや、石器製作に関する道具が含まれている可能性があるかもしれません。

近年、石皿・台石とのセット関係や使用痕研究から、磨る・敲いた対象物や動作の解明が進んでいます。堅果類以外にも、石器製作や赤色顔料の磨り潰しなど様々な用途が想定されていますが、磨石類の具体的な利用状況について、謎は多く残ります。複合的な痕跡を整理することで、縄文時代の食料獲得・石器製作に関する加工技術や、地域石材の利用について、実態解明に欠かせない情報を提供する資料なのです。（杉木有紗）

注1：伊藤博司 2007「打製石斧の製作—駒木野遺跡出土の石器群を中心に—」『縄文時代の考古学』6 同成社
参考文献：長野県埋蔵文化財センター2000『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大塚遺跡・窪河原遺跡）』縄文時代編



写真2
側面に敲打した
痕跡（→部分）が残る磨石類

小笠原秀政の印判

今年は松本藩主を2度務めた小笠原秀政(1569～1615) 生誕450年の節目の年です。今回は秀政の使用した印章(印判)についてみてみましょう。

戦国大名などが文書を作成するとき、書状などのプライベートなもの、あるいは特別な恩賞や重要な機密などの裏付けとして作成者個人の人格を強調して出すものには「花押^{かきはん}」(書判)が使用されることが多いようです。また、印判は大量に発給する場合に適しており、命令伝達や定書など画一性が認められるものに多く使用されています。

甲斐国武田家では信虎から始まり、晴信・勝頼の時代の龍朱印など、印判状が大量に発給されたことが知られています。いっぽう隣国信濃では、晴信と同世代の長時は印判状を使用した形跡はなく、子貞慶も天正10年府中へ復帰して初めて黒印を使い始めました。奉行人^{ほうしん}を介した奉書だけでなく、恩賞や書状のような貞慶の直書にも使用されており、必ずしも使い分けされていないようです。

しかし秀政の時代には印判の使用方法に変化が見えます。秀政は4つの印判を使用しました。このうち秀政は「書」という印を用いました。これは珍しい馬蹄形^{ばていけい}のかたちをしています(慶長19年からの2代目「書」印は正円形)。馬蹄形印を使用したのは織田信長^{てんかにぶをし}「天下布武」と子信雄^{いを}「威加海内」・信孝^{かいだいにくわふ}「式劍平天下」が知られます。

そして、秀政が慶長19年から使い始めた第4の印こそ、織田信孝の使用した「式劍平天下」(一本の剣で天下を平らげるという意味)を模刻したものでした。なぜ秀政は、馬蹄形のこの印を使用したのでしょうか。

この印判が使われた時期は慶長19・20年のわずか1年あまりしかありません。飯田から石川氏改易のあとを受け、松本に移った直後から秀政の没する直前までです。しかし、現存する古文書数は17通と、現存する印判状のなかでもっとも多いものでした。ほとんどは村役人に出された法



小笠原秀政法度(松本城管理事務所蔵)

度・定や寄進状に限定され、使用方法が「領内統治」「寺社統制」に特化し他と区別され

ていたことがわかります。この時期には、法度や定を村や社寺に命令・伝達する行政システムが確立していたため、大量の印判状発給が必要となったのです。父貞慶の時代との大きな差異と言えます。

この印を最初に用いた信孝と秀政の関係はどうだったのでしょうか。秀政の妻は徳川家康の嫡男信康と織田信長の娘五徳との間に生まれた孫娘(福姫または登久姫)で、信孝は秀政にとって義理の叔父でした。信孝がこの印を使用したのは信長居城だった岐阜城で信長の後継三法師の後見をしていた天正10年10月～12月に限定されます。つまりこの印は信孝の立場や政治的メッセージが込められました。

秀政が織田氏の象徴ともいえるべき馬蹄形の印を使用したのは、自らの出自を織田氏と重ねたのでしょう。しかも、「式劍平天下」という極めてメッセージ性の強い印を使用することで、父祖伝来の地に復帰した自分の「正統性」を、石川氏改易^{ひれき}の直後の松本領民に披瀝する意味も持ち合わせたといえます。

(村石正行)



小笠原秀政朱印(左)と織田信孝黒印(いずれも個人蔵)

各種講座のご案内

県立歴史館の 信州学講座

信州学講座は平成30年度から新たにスタートした講座で、初年度は館内の講座（「県立歴史館の信州学講座」）を9回、館外の出前講座（「県立歴史館の信州学出前講座」）を4回、土曜日に実施しました。開講の目的は、長野県域を中心とした足元の歴史を丹念に掘り起こし、その研究成果を多くの皆様方にわかりやすく解説することにあります。講師はおもに当館職員ですが、県内各地で活躍されている他の博物館等の職員をゲストにお迎えすることもあります。毎回、聴講者の皆様に身近な歴史に関する興味を深めていただき、地域の未来を創造する原動力となればとの想いを込めて、90分間、講師が熱く語っています。「科野の成立」、「諏訪信仰」、「河童」といった多彩な内容なので、幅広い年齢層の皆様に親しみを持ってご聴講いただくことができました。

本年度の館内講座は10月から3月まで残り5

考古資料課では、年4回ほど館内職員が、来館者様の声やアンケートによる要望にお答えできるように、さらに巡回展の内容にも関わるよう検討し講座を開設しています。昨年度の4回の講座では、503名の参加があり、好評を博しました。

また、今までの長野県立歴史館の巡回展は、「長野県の遺跡発掘」として速報性の高い資料の展示を柱に構成していました。2019（令和元）年度からは名称を改め、速報性の高い資料とともに、館蔵資料を柱のひとつとしてリニューアル



回、館外講座は上田市立信濃国分寺資料館、箕輪町郷土博物館、諏訪市博物館、安曇野市豊科郷土博物館に出張して行う予定です。

特に「信州学」の内容をより広くお伝えするために長野県立歴史館職員等が総力をあげて執筆した『広い世界とつながる信州』（2018年信濃毎日新聞社発行）を基にした講演を目玉にしています。

先史時代から近現代に渡る郷土の歴史を紐解く本講座に、是非大勢の皆様のご参加を、職員一同お待ちしております。



し、「長野県の考古学」としました。

考古学講座も、巡回展のテーマに関わる内容とし、今年度は「時代を映す匠の技」としました。

第1回「石槍の製作～命をつなぐ道具づくりへの挑戦～」では、「石器について、基本的な読み取り方をもっと知りたい」という声にもお答えできるように、講座の前半には、石器の基本的な名称、実測図の読み取り方等についても解説いたしました。講座後の企画展示解説では、製作方法もふまえ、苦勞して石槍づくりに挑んでいた人たちの“匠の技”に、より踏み込んだ質問も多く寄せられました。今後も、巡回展との関わりと皆さまのご要望に積極的にお答えできるようにアンケートを大切に内容を検討していきたいと思ひます。

考古学講座



開館の翌年1995（平成7）年よりスタートした古文書講座。以来24年間形を変えながら現在まで続いています。

当初は職員一人で1講座10回のみ担当する形態でしたが、受講生のレベルやニーズに合わせ、現在は初級2・中級2・上級1講座、年間延べ約220名が参加する大所帯となりました。長年の研鑽で練達した受講生のなかからは地域の古文書学習会の講師となった方もいます。

これとは別に2017年度より、10代（中・高・大学生）向けの「ティーンズ古文書講座」が開講されています。今年度は2020（令和2）年3月25日（水）～28日（土）にかけて開催予定です。



古文書講座（初級）の様子



ティーンズ古文書講座の一コマ



当館では2017年度より、おでかけ歴史館事業を実施しています。これは、当館から離れた地域（南

信・木曽地域）の学校や公民館に、職員が収藏品とともに出向き、体験活動などを中心に行う出前授業のことです。体験プログラムは「土器や石器にふれよう」「古文書に親しもう」「まが玉をつくろう」など、体験を通して歴史への興味関心を深めていただけるものを多数準備しています。2017年度から2年間で小中高校合わせて36学級と公民館2館で実施しました。

昨年度の実施例をもとに、体験プログラムの一部をご覧ください。

実施校や実施公民館からは「歴史学習への意欲が高まった」「既習部分の学習を更に深めることにつながった」という感想をいただきました。

本年度もおでかけ歴史館へのお問い合わせ、お申し込みをお待ちしております。

①地元の歴史を学ぶ！ 地元の歴史をわかりやすく紹介します



②縄文人登場！ 縄文の生活体験のはじまりです



〈土器もち体験〉



〈弓矢体験〉

③まとめ 体験を振り返ります



■2019年9月～12月の行事予定

9月

休館日
2・9
17・24
30

巡回展

長野県の考古学

●塩尻市立平出博物館
7/27(土)～9/16(月・祝)

開館25周年企画展

秋季企画展

「戦国 小笠原三代」

9/7(土)～10/14(月・祝)

- 9/14(土) ○館長講演会
「塩尻峠の合戦」
- 9/21(土) ○講座 (村石正行 当館職員)
「小笠原長時のネットワーク」
- 9/28(土) ○講座 (村石正行 当館職員)
「小笠原家を中興した貞慶」
- 10/5(土) ○講座 (村石正行 当館職員)
「飯田藩・松本藩時代の小笠原秀政」
- 10/13(日) ○開館25周年記念講演会
「小笠原氏の軌跡
ー小笠原は将軍になれたのかー」
講師：本郷和人 氏
(東京大学史料編纂所教授)

●飯田市美術博物館
10/5(土)～11/10(日)
■10/12(土) ミニシンポジウム

特別企画展

「国宝土偶」

10/26(土)～11/10(日)

- 10/27(日) ○講演会
「縄文土偶のかたち、楽しみ方」
講師：原田昌幸 氏
(文化庁主任調査官)
- 11/9(土) ○講演会
「国宝土偶を掘る
～出土状態から土偶を考える～」
講師：守矢昌文 氏
(茅野市尖石縄文考古館館長)

「中部高地の土偶」

11/23(土・祝)～2/2(日)

- 11/23(土・祝) ○講座
「長野県内の出土土偶」
講師：寺内隆夫 (当館職員)
- 11/30(土) ○イベント
・縄文風リース作り
(当館のエントランス)
- 12/7(土) ○第4回信州学講座
「土偶と土器胎土」
講師：水沢教子 (当館職員)

講座・イベント

古文書講座

初 級 A 第4回 9/15(日)
B 第4回 9/12(木)
中 級 A 第4回 9/14(土)
B 第4回 9/12(木)
上 級 第5回 9/21(土)

信州学出前講座 in箕輪

9/21(土) 箕輪町郷土博物館

遺跡探訪会

10/5(土)
「タイムスリップ縄文～火焰型土器
に出会う旅～」 行先：新潟県

古文書講座

初 級 A 第5回 10/ 6(日)
B 第5回 10/10(木)
中 級 A 第5回 10/ 5(土)
B 第5回 10/10(木)

信州学講座

第3回 10/19(土)
「博物館で考える信州の温泉」
千賀康孝 氏 (松本市立博物館)

信州学出前講座 in諏訪

11/23(土・祝) 諏訪市博物館

考古学セミナー

第2回 12/1(日)

近世史セミナー

12/8(日)

考古学講座

第3回 12/14(土)
「石斧製作の移り変わり」
町田勝則 (当館職員)

表紙の写真の解説

- (左) 黒田家が戦勝記念に描かせた屏風
大坂夏の陣図屏風 (重要文化財 大阪城天守閣蔵)
- (右) 小笠原長時が戦勝祈願したと伝わる
木造大日如来如来像 (松本市沢村区蔵)
- (左) 小笠原秀政が着用したと伝わる
二枚胴具足 (廣澤寺蔵)
- (中) 小笠原氏歴代の守護神
摩利支天坐像 (飯田市開善寺蔵)
- (右) 小笠原長時を厚く遇した「最初の天下人」
三好長慶画像 (南宗禅寺蔵)

行事アルバム

** 県立歴史館の信州学講座 **



6月8日(土)、第2回講座を開催しました。
「石器から読み解く 縄文時代の生業と黒曜石の生産活動」と題して、塚原秀之氏(長野市教育委員会)に講演していただきました。石鏃の出土量を検討して、黒曜石の消費や流通を考えてみる内容に、73名の参加がありました。

** 予告 歴史館で夏休み **



8月4日(日)「歴史館で夏休み」を開催します！
今年も、お子さんたちが夏休みの期間に合わせた楽しいイベントを行います。是非、おでかけください。5つイベントをご紹介します。

- ①石のアクセサリづくり
石を削って、世界で1つだけのアクセサリをつくります。
- ②プラ板マスコットづくり
プラ板に、土器などの絵をかわいいうまく描いてマスコットをつくってみよう！
- ③バックヤード探検
普段は入ることができない館の裏側にご招待します。
- ④縄文人になって遊ぼう！
本物の土器を持ったり、縄文人の服を着て写真を撮ったりしよう！



- ⑤昔話ビデオ上映
『まんが日本昔話』から夏休みを楽しんでいただける…ちょっと不思議なお話を上映します。



イベントには材料費がかかるものもあります。
詳しくは当館HPをご確認ください。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.100

2019(令和元)年7月30日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社